ISSN 1344-2937

全国患者図書サービス連絡会会報

Vol.21 No.2・3
(通巻 No.75)
April 2015

目　　次

[会員の声]
偕成社のとりくみについて
株式会社 偕成社　藤坂 康司…… 23

[持 論]
布の絵本の可能性
～34年間の実践から～　東京布の絵本連絡会
代表　渡辺 順子…… 25

読書ボランティア賛歌
柴田 俊明…… 29

[見学記]
千葉県医療系４図書館見学ツアーに参加して
湘南藤沢徳洲会病院
医学情報センター　伊藤 友香…… 31

[本の紹介]
渡辺有理子著 「希望への扉 リロダ」　山口 文子…… 33

[コラム]
「後進国 (2)」　富山病院 院長　嶋 大二郎…… 34

[７月講演会案内]

〈会員の声〉

偕成社のとりくみについて

株式会社　偕成社
藤　坂　康　司

はじめまして、児童書出版社偕成社で販売の仕事をしております藤坂康司と申します。

偕成社は1936年に創業し来年2016年に80周年を迎えます。戦前は経済関係の書籍などを出版していましたが、戦後になって児童書の専門出版社となりました。これまでの主な出版物としては『はらぺこあおむし』『ノンタンシリーズ』『からすのパンやさん』などがあります。1970年代後半より障がいに関係する本作りに力を入れてきまして、今日まで偕成社出版物の一つの柱となっています。

このたび偕成社では、静岡県立こども病院図書室司書の塚田薫代さんにご意見をいただきながら『子どものからだとこころ、さまざまな障がい、について理解を深める本』を集めた目録を制作し、全国の小中学校図書館、公共図書館に配布を始めました。

目録では、関連書籍を大きく３つにカテゴリー分けし、

① 子どもたちの「からだ」や「こころ」、「さまざまな障がい」について理解するための本
② 当事者によって、描かれたり語られたりしている本
③ 「からだ」や「こころ」、「さまざまな障がい」に、特別な配慮が必要なこどもたちのための本

各々カテゴリーの書名ごとに、主題となる障がいや病気について標記分類しました。

書名だけでは内容を判断するのは難しく、その本を本来必要としている人に情報が届かない可能性が高いことが危惧されます。そこで、まずは読者の一番のガイド役である学校・公共図書館の方々、病気や障がいをもつこどもさんたちに接していらっしゃる方々に、本の内容を今まで以上に理解して戴けたらと、この目録を編集しました。

「障害者差別解消法」の施行を2016年４月に控え、地域行政や学校現場でのインクルーシブ教育の取り組みも本格化されましょうか。難しい問題をわかりやすく伝える児童書は、障がいや病気について理解を深める重要な役割を担えると信じています。

読み聞かせやブックトークの選書に、図書館、図書室でのテーマ別展示企画や書架分類のコーナー作成などにこの目録が少しでもお役に立てることを願っております。

必要とされている本に出会うことができる環境の鍵をもつ、患者図書サービスにかかわっていらっしゃるのみなさんに活用して頂ける情報発信に努めたく、今後ともどうぞ宜しくお願い致します。

※目録『子供の「からだ」と「こころ」、「さまざまな障がい」について理解を深める本のリスト』は弊社ホームページ「お問い合わせ」ページより目録請求、願います。

【株式会社偕成社】
https://www.kaiseisha.co.jp/inquiry.html
※同内容のPDF版『バリアフリー本のリスト』は下記よりダウンロード可能です。
http://www.kaiseisha.co.jp/business/download.html
※新刊情報、弊社イベントやロングセラーなどご紹介している公式Facebook
https://www.facebook.com/pages/偕成社/552925014817568

〈時　論〉

布の絵本の可能性
～34年間の実践から～

東京布の絵本連絡会　代表
渡　辺　順　子

＜全国患者図書サービス連絡会との出会い＞

私が「全国患者図書サービス連絡会」を知ったのは、設立から６年目の1999年でした。この年の２月講演会で、前半が浦安市立中央図書館の「公共図書館における障害者サービスの動き」常世田　良司書、後半が「布の絵本と入院児サービス」の演題で渡辺順子が担当しました。終了後、即入会しました。

その訳は、1973年に子ども文庫を開設して間もなく、交通事故で長期入院をした男の子がいました。その子向けに、段ボールに絵本を入れて出前文庫をしました。大部屋に移ってからは高齢者や若い男性などにも絵本が喜ばれ、退院時には惜しまれたくらいでした。その間　病院側と相談をして、図書コーナーを作る寸前まで進展しましたが、最後、看護婦長の理解が得られないまま、退院となり不発に終わったのです。しかし病院図書室の必要性は心に深く残り、文庫活動の１つに“入院児にこそ読書を”という夢は持ち続けていました。しかし実現のための術がないまま20年余が過ぎた頃に、上記の講演の依頼があり、神の導きを感じました（無神論者ですが）。

以来、会員としての私ができることで関わってきました。講演としては2000年７月にブックスタートの視察団としてイギリスに行ったついでに訪ねた病院図書室の報告を「バーミンガム国立小児病院の図書室視察から」(2001・５)。 2003年２月、インド・ニューデリでの布の絵本ワークショップ報告として「布の絵本・インド報告」(2003・５)。「今　なぜ　０歳から絵本なのか？」～全ての子どもにことば（母語）の喜びを～（2007・６)。「ことばの喜び・絵本の力」～21世紀の担い手たちへの祈りをこめて～（2009・６）などです。

年２回の講演会はよく企画されていて、非常に勉強になっています。但し、私は活動が多忙で、全てに参加できないことが非常に残念です。しかし概略が会報で報告されますので貴重です。担当の皆様には頭が下がります。

尚、確認です。全国患者図書サービス連絡会は、図書館界の概念で言えば「障害者（児）サービス」です。福祉の世界では障害者（児）とは視覚障害、聴覚障害、知的障害など個人の心身障害を対象に位置づけられています。しかし図書館界で「障害者サービス」と言ったときは、「図書館利用に障害のある人々へのサービス」を言います。この「障害」とは個人にあるのではなく、図書館の側にあると言うことです。つまり「障害」は個人ではなく、社会や環境にあるという捉え方です。私自身42年前開設したすずらん文庫（健常児中心だった）に、1981年に視覚障害の子や発達障害の子、聴覚障害の子どもたちが参加し始めたことで、心身障害児のための出前型すずらん第２文庫を開設しました（現在は独立して活動

を継承)。その後、この子たち親子の図書館利用の代弁をするために、1992年、日本図書館協会に個人会員として入会しました。そこで障害とは「図書館利用に障害のある人々」という共通認識が、既に1970年から1980年初頭にあったことを知りました。今日の図書館界では当然のことになっていますが、念のため全国図書館サービス連絡会の存在意義の重要性を皆さんと確認したく思い記載しました。私自身、当初は福祉の視点での障害で活動をしてきましたが、現在では心身障害児を初め、0歳児、入院児、少年院、乳児院、在住外国の子どもたち（多言語サービス)、心病む子どもたち（いじめ、虐待、離婚）のためにも取り組んでいます。

＜布絵本･使う子どもの側面から＞（生まれた地域で育ち、学び　生きる権利あり）

「布の絵本とは＝絵本＋遊具･教具」布で製本された手作りの絵本。絵の部分の具体物は、ボタン、スナップ、カギホック、吸着テープ（マジックテープ)、紐、ファスナーなどで着脱ができます。

① 布の絵本の機能（知的発達と自立のために）

- 「ことば･母語を促す」「聞く力」を育み、肉声での言葉（母語）のひびきを楽しみながら、ことばの獲得とコミュニケーションの喜びを身につける。
- 「物の認識」衣・食・住を中心に、日常生活に必要な物の名前、動作の意味を知る。
- 「色、形、数の認識」コミュニケーションに必要な情報の獲得、発信。
- 「ことばを話す」獲得したことばで日常会話ができるようになり、簡単なストーリーを楽しむ。市販の絵本、図書館利用へ移行できる。
- 「着脱衣の練習」マジックテープ、ボタンはめ、スナップ止め、ファスナー、紐結び、カギホックなど、自立に必要な手指の使い方が楽しく身につく。
- 「布の絵本の遊具性」 繰り返し遊びながら、子どもの「自発性、主体性、集中力、観察力」等々が発揮され、結果において、0歳からのどんな子にも自立に必要な「作動能力」や「言語能力」を身につけることができる。

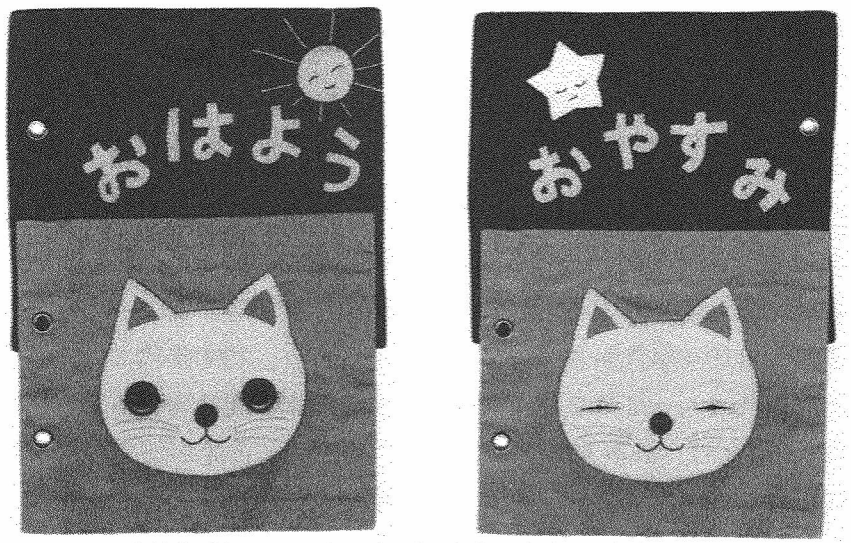
②親子のコミュニケーション（対面育児の回復）

子どもにとって布地は母親の肌につぐ第二の出会いといわれるほど、ぬくもり、優しさの感触をもっています。0～1才児なら親子向かい合って、アイコンタクトをとりながら、ことばかけの手段として活用できます。1、2才児ならことばも絵の部分の着脱もまねをして遊び始めます。2、3才児なら1冊の布の絵本を子ども自身堪能し始めます。3，4歳児なら下の子にやってみせ、親代わりもしています。

③布の絵本･使い方の基本、（子どもの主体性尊重＝こどもペースで）

大人ペースで強要せず、子どものやりたがる気持ち（子どもペース）を尊重すること。同時に作品と子どもを放置せず、日々どれだけ手指の動きができるようになったか、ことばが出るようになったか、観察することが大事です。布の絵本をとおして、子ども時代の著しい発達　成長の素晴らしさを感知できます。できなかったことが初めてできた時には褒めてあげて欲しいです。 布の絵本は視覚的にも触覚的にも子どもを楽しませて

います。さらに布の絵本の１冊から親子の絆も深まります。
現在では我が子に作る、育児中の親対象の講習会も広がっています。東京の荒川区では妊婦さん対象に「わが子を手づくりで迎えよう」というテーマで講習会を担当したことがあります。受講者たちから、胎動が活発になったという感想がでて話題になりました。
手作りは子どもにとって最高の喜びであり愛情です。育児期に必要なことは「お金をかけずに心と手間をかける」こと。



布絵本「おはよう・おやすみ」 東京　すずらん文庫　原作

着物シアター「かさ地蔵」 広島　グループつくしんぼ　原作

＜布絵本・作り手たちの側面から＞（21世紀に求められる　新しいボランティア活動）

・大量生産、大量消費、大量廃棄の時代に「手づくり」という人間ならではの基本の営みを回復。
・布の絵本ボランティアを通して「社会参加」の喜びを。高齢化社会での「生き方の創造」。
・地域コミュニケーッション喪失の現代、新しい「人間関係の回復」の場に。
・リサイクルによる作品制作は「環境問題」を意識した創作の喜びになっている。
・子どもたちへの布の絵本制作は、一針一針に心をこめた「次世代育成」の活動。

＜東京布の絵本連絡会の活動＞

1990年、当時の24グループで「東京布の絵本連絡会」を発足させました。その目的は（1）各グループの情報交流、（2）作品のレベルアップ、（3）布の絵本の普及のため。その後、布の絵本づくりは単なる手芸レベルではなく、自己満足の世界でもなく、福祉、保育、教育等への「社会参加の喜び」であると、位置づけの確認をしました。目的の（1）（2）は隔年で「作品交流会」をしています。（3）の布の絵本の「普及活動」としては、1996年に(公財)伊藤忠記念財団の子ども文庫助成を受けて「布の絵本からのメッセージ」を発行しました。海外への普及も考えて和英文併記としました。国内外布の絵本の寄贈時には添付。

＜国内外への普及活動＞

私の練馬区の図書館では1985年からボランテイア養成講座を実施し、現在1000冊超える布の絵本を所蔵し、老若男女すべての利用者に貸出をしています。

国内では各地で図書館主催での布の絵本ボランティア講座が始まっています。

海外での広がりは1980年代からアジアを中心に始まり、1990年代には北欧、ヨーロッパに広がり、2000年代に入ってアフリカ大陸にも布の絵本が届けられるようになりました。

・ケニアには2004年９月、日本人によってエンザロ村に図書館が建てられました。その開館お祝いに駆けつけた児童書翻訳者が、布の絵本の読み聞かせをし、寄贈しました。

・タンザニアには2005年９月､海外教育開発研修生を通じて、エイズ孤児の施設とストリートチルドレンの施設に寄贈。

・モザンビークと布の絵本は、モザンビークで、銃を日本からの放置自転車と交換するという「エコ＆ピース」運動の「NPO法人えひめグローバルネットワーク」と愛媛県弓削島布の絵本グループ「ちゅうりっぷの会」との共同で、モザンビークのマップを縫い寄贈しています。私も布の絵本を寄贈。今年は同NPOがモザンビークから布の絵本の受講生を招き、現地での普及を企画中。

・南アフリカは､IFLA（國際図書館連名）ダーバン大会参加者に託した６冊が、南アの幼稚園、学校への移動図書館で活用されています。教材として評価され、数の布絵本「いくつ？」100冊が現地で制作されました。

布の絵本34年間の実践の詳細は　下記の冊子にまとめました。

「広がり深まる　布の絵本の世界」～人権･環境･平和の願いをこめて～

東京布の絵本連絡会　発行　2014年７月　62頁　400円

問い合わせ先　　渡辺順子　177－0041東京都練馬区石神井町４－15－27

TEL・FAX　03－3996－8033

〈時　論〉

読書ボランティア賛歌

柴　田　俊　明

世界に誇る活動

「和食」や「和紙」がユネスコ無形文化遺産に登録され、漫画、文房具、ランドセル、抹茶菓子などが外国人観光客の垂涎の的になる。日本文化は今や「COOL JAPAN」と礼賛され世界の注目を集めています。でももうひとつ日本には世界に類をみない「文庫」というCOOLな文化もあるのです。

敗戦後、新しい＊価値観の中で生まれた社会変化の中で、子どもたちに良い本を届けようという女性たちが中心になって作られた私設の家庭図書館活動である「子ども文庫」は、約半世紀を経て社会情勢に敏感に対応しながら、保育園、小中学校、支援学校、公民館など地域の公共の場で読み聞かせ活動などを積極的に行う等、活動内容が広がっています。

病院でも養護施設でも

特に近年、文庫活動の多様化の中、小児病棟やファミリーホーム等で活動する読書ボランティアさんが増加しています。難病や大きな怪我で長期闘病を余儀なくされている、また虐待や育児放棄という環境の中で温かな家庭ふれあいを経験していない…、そんな子どもたちと向き合いながら、読書を通じて彼らを支えていこうと奮闘する方々が、日本の全国で地道に真摯にボランティア活動を続けています。

真摯に取り組む姿勢

神奈川県伊勢原市のあるボランティアグループは、長年子どもたちに地域で読み聞かせ活動を続けてこられた方々で構成。数年前、市内にある大学附属病院の小児病棟で闘病生活を続ける子どもたちに出会い、「私たちはこれからこの子達を一生懸命支えよう」と新たな目標を作り、同院小児病棟の婦長さんと話し合い、定期的に読み聞かせや院内文庫つくりに力を注いできました。そして３年前、病棟内に小さな文庫スペースを作りました。院長先生から「にこにこ文庫」という名前を付けて頂き、ますます活動意欲をみなぎらせています。

名古屋市にある病院の小児病棟で読書活動をされているボランティアグループ。小児がんと闘う子どもたちが来る日も来る日も痛く辛い治療とリハビリに追われている毎日を思い、良い本に出会う機会を作りたいと願って活動を続けています。病院予算には子どもたちの図書を購入するゆとりがないので、プレイルームの絵本を増やそうと寄贈本を募り、助成金にご応募する等の努力を積み重ねています。

その他、自宅を使って子どもたちを養護するファミリーホームの中には、幼い頃絵本を読んでもらった経験のない子どもたちのために、少ない予算の中から絵本を購入し毎日短い時間ですが一緒に絵本を読みながら心の痛みに寄り添っている方々もいらっしゃいます。

ただ、子どもたちの笑顔のために

そんな読書ボランティアさんに共通しているのは、明るさと熱意と類まれなる強い向上心です。どなたも皆「子どもたちに良い本を届けること」について社会的責任を感じながら活動されています。そのため、購入する1冊、子どもたちに読んであげる1冊について時間をかけて情報を集め話し合い、チャンスがあれば選書や読み聞かせの講座を受講して勉強されています。

病院も養護施設も子どもたちの図書を購入する予算はわずかです。ボランティアさんたちは自ら図書館に出向き絵本を借りる、手作りのパネルシアターや紙芝居を作る等の努力をされていますが、図書館までの交通費や製作のための材料費など自己負担しながら活動しています。そのため会員会費を集め、それを活動経費に充当しているのです。

こんなにご苦労を重ねているのに、皆さんはため息をつく、愚痴をこぼすという様子を他者に見せません。それどころか、いつも優しい笑顔とまなざしで、「子どもたちが目を輝かせて本を読み、読み聞かせを聞いてくれていることが何よりの喜びです」「私たちは子どもたちから元気をもらっています」…、こんな素敵な言葉を口にされます。

活動はボランティアでも、精神はプロフェッショナルなのです。

子どもたちを支え続ける

日本のボランティア元年は1995年（平成7）年1月17日の阪神淡路大震災の時だと言われています。でもそれに先立つこと四半世紀も前、1970年代前半頃から子どもたちに良い本を届けるべくスタートを切り、今なお日本全国津々浦々で地道で真摯な草の根活動を続けてこられている方々こそ、日本のボランティア活動の先駆者かもしれません。

東日本大震災直後、すぐに被災した方々のために動き出したのも読書ボランティアさんたちでした。そしてさまざまな支援活動が少しずつ減ってきている今でも「できる時にできることを無理せず息長く」続けている方々がたくさんいらっしゃいます。

いつも子どもたちの身近に

今日も誰かがどこかで、子どもたちの心と体の痛みに寄り添ってくれていることでしょう。何の見返りも求めず、子どもたちのために何冊も絵本のはいったバッグを背負って、汗かきながら病院や施設を笑顔で訪ねる読書ボランティアさんたちを、心から讃えたいと思います。

すぐに自分の都合の良い結果ばかりを求める「成果主義」が蔓延する現代に、10年先15年先に子どもたちの心に美しい花が咲くことを願って、地道に活動を続ける読書ボランティアさんたちの思いと実践力は、もっともっと理解され、評価され、そして支援されるべきです。

子どもたちを笑顔で支える読書ボランティアさんたち、ほんとうにかっこいい！

みなさんもまさしく世界に誇る「COOL JAPAN」です！

〈見学記〉

千葉県医療系４図書館見学ツアーに参加して

湘南藤沢徳洲会病院　医学情報センター
伊　藤　友　香

2014年12月６日、神奈川県在住の病院図書室担当者が中心の合計７名で、千葉県済生会習志野病院の患者図書室あおぞらを始めとする４つの医療系図書館の見学に行ってきました。本来は「非公式ツアー」としてこっそりお邪魔する予定でしたが、先輩司書の人脈のおかげで、医療法人社団誠馨会千葉メディカルセンター図書室、千葉中央看護専門学校図書室、東邦大学習志野メディアセンターにもお邪魔し、充実した一日を過ごさせていただきました。簡単ではありますが、皆様にその時の様子をお伝えしようと思います。

「千葉メディカルセンター」は12月１日に新築移転したばかりで、引っ越し間もないお忙しい中、見学させていただきました。職員用図書室はとても落ち着いた雰囲気で、心が和む空間でした。サブエントランスを入ったすぐの場所に患者図書コーナーをこれから立ち上げる予定だそうで、書架や閲覧机など什器が備えてあり、見学者からは「素敵ですね」「こういう机、かわいいですね」などの声があがっていました。

「千葉中央看護専門学校」は、千葉メディカルセンターと同じ敷地内にあります。2015年１月から使用されるという、まだ学生も入っていない新校舎に特別に入らせていただきました。ここの図書室は衝撃的でした。まず入口すぐの場所に図書室があります。そしてドアや壁などの仕切りのないスペースに効率良くカウンター・書架・閲覧机や書庫などが配置されていました。その隣にはこれまたオープンスペースにキャレルデスクや閲覧机がズラッと並んでいて、カフェテリアのような作りでした。本当に素敵な空間で、学生さんたちは勉強が楽しくなるだろうな、と羨ましく思いました。

お昼をはさんで電車で津田沼へ移動し、バスに揺られて「千葉県済生会習志野病院」へ。８階にある患者図書室あおぞらは、屋上庭園からの美しい風景や空が見渡せる位置にあり、患者さんがひっきりなしに訪れる活気ある図書室でした。案内していただいた屋上庭園からは晴れた日には富士山や東京スカイツリーも眺められるそうで、ゆったりとした時間が流れるこちらもまた、素敵な場所でした。私たちが訪れた時は、カウンター職員の方と患者さんが一緒に折り紙を折っていました。よく見ると書架のあちこちに折り紙作品が展示されています。医学書だけでなく、小説や文庫本、絵本、マンガもあり、医療関連のパンフレットも充実しています。私も患者図書室を管理していますが、もっと気軽に立ち寄っていただける工夫をして、よりよい資料の充実を図らねば、と反省しました。

習志野病院から徒歩で数分の場所にある「東邦大学習志野メディアセンター」が最後の

見学場所です。こちらもまた、学生達でとても賑わっていました。いつも学生たちで溢れているそうです。私が大学生だった時の図書館は、学生よりも職員の数の方が多い印象だったので、ちょっと唖然としてしまいました。なぜこんなにも学生がいるのでしょうか。資料の数？試験前だから？何かのイベントがある？いや、違います。この日見学した図書館にも共通点がある気がしました。考えていたら、ふと答えがわかりました。それは「人」でした。

①本は利用するためのものである、②本はすべての人のためにある、③すべての本をその読者に、④読者の時間を節約せよ、⑤図書館は成長する有機体である。これはランガナタンが提唱した図書館学五原則です。この日出会った図書館担当者の方の根底にはこの原則がしっかりと根付いていらっしゃいました。だからこそ、居心地の良い雰囲気で、たくさんの利用者が足を運び、活気ある空間になっているのではないかと考えました。なんのために図書館があり、誰のための図書館なのか、そのためにたくさんのアンテナを張って情報収集し、かつ速やかに実践されているのです。親切で笑顔が絶えず、知識の豊富さも基礎があるからこそ発揮されていらっしゃるのです。図書館学五原則は、「人」がいないと実現できません。図書館担当者として、改めて「人」の大切さを痛感しました。

患者図書室の運営に関わって２年半が過ぎました。おかげさまでボランティアスタッフにも恵まれ、順調に運営してはいますが、利用者数が伸びていないのも現状です。600冊程だった蔵書も1,000冊を超えました。せっかくある大切な資源です。内容を精査し、もっとたくさんの方に利用されるよう、スタッフの力を借りつつ、今後も頑張って行こうと思いました。

今回の見学でもう一つ反省したことを最後に述べたいと思います。それは、写真を撮るのを忘れてしまったことです。写真があれば、もっと各図書館の素晴らしさをお伝えできたのに、本当に悔しい思いでいっぱいです。次回からは、デジカメを握りしめて、お邪魔させていただこうと思っています。

最後になりましたが、見学を快く承諾していただいた皆様、一緒に見学に参加した先輩方、本当にお世話になりました。

〈本の紹介〉

渡辺　有理子著

『希望への扉　リロダ』

絵・小淵もも　　発行・アリス館

2012年刊　p.152　1,300円＋税

渡辺有理子作『希望への扉 リロダ』アリス館2012年 を紹介します。

渡辺有理子さんは以前当会で講演してくださったことがあります。そのときは、シャンティ国際ボランティア会(ＳＶＡ)のスタッフとして、タイにあるミャンマー(ビルマ)難民キャンプで図書館支援に携わった経験を話してもらいました。現地で、図書館の建築、図書の収集や調査、現地スタッフの養成をされたそうです。三年間の活動を直接伺って、大変感動したのを覚えています。

この本は渡辺有理子さんが日本の子どもたちに難民キャンプの図書館活動のことを伝えたいと、書いたものです。故郷を追われ、タイの難民キャンプへ辿り着いた、主人公の少女マナポ。勉強熱心な彼女はリロダ(図書館)で働きながら、難民キャンプの子どもたちに本のもつ力を伝えていきます。

現在私が勤務している小学校の図書室で、この本と出会いました。担任の先生に、何回にも分けて読んでもらったと言う生徒もいました。マナポと同じ年頃の子どもたちにはもちろん、大人にもお勧めの本です。

山口　文子

＜コラム＞

「後進国（2）」

国立病院機構　富山病院（小児科医）
嶋　　大二郎

余りのおいしさに最後尾へ廻り二回目を飲んだ子の事件が話題になったのは、今調べると1961年。少ないが極甘のシロップを飲めた上に母親が喜ぶわけを、小学４年生の私など理解するよしもなかった。猖獗を極め、我が子の重症麻痺や死への恐怖で日本の親を震え上がらせたポリオ。窮余の策として､60年に当時敵国に等しかったソ連から超法規的に緊急輸入した生ワクチンの効果は絶大で、患者は激減している。

史上最初のワクチンの功績は、誰もが知る種痘。天然痘を撲滅し、ワクチンは中止された。ポリオは、撲滅直前で足踏み。ＷＨＯ第三の目標は麻疹だが、道は遠い。

理解ある市民や専門家からの求めは強いのに予防接種の定期化枠の広がりは鈍い。前回述べた日本のワクチン行政の後進性を、自分なりに、短い紙幅で考えてみたい。

ワクチンを一つ無料化すれば年間数十億円の出費。病苦を避けられるに留まらず、発病による医療費や後遺症に伴う社会保障を考えれば、経済的にも見合うはずだ。

また、役所は「行政に誤りは無い」という建前から副反応の責任を延々と裁判で争うのではなく、科学的に副作用の疑いが拭えない場合は、被害者を速やかに救済した上で更なる安全性の向上に努める方が、ずっと国民の幸福につながるはずだ。

ただ、国の保身的怠慢の一方で、市民の理解不足、健忘性にも原因はあると思う。

1）　ワクチンで予防できる病気（ＶＰＤ)の激減は、接種率を上げ免疫で広く覆ったことによる社会的防衛の成果であり、率が下がれば流行は再燃するという認識を市民は持ちにくい。そして昨今の麻疹･風疹騒ぎのようにＶＰＤが散発する時、罹るのは基本的に未接種者だという個人的防衛の意義も、あまり理解されていない。少ない病気で我が子には注射したくない、かかっても現代は治療可能（多くはウィルス感染で、治療効果は期待薄)、などと考え違いをする人が少なくない。

2）　副反応を殊更に強調し、知識の少ない一般人を不安へ駆り立てる偏ったネット情報の若い親への影響も無視できない。副作用のない薬はないし、今のワクチン副反応の殆どは些細なものだ。それでも死亡や後遺障害が百万人に一人出た場合、百万人のために一人を犠牲にしてよいのか。議論し出せば際限が無い。副反応が不安だと接種をやめれば、疾患は流行し、それに伴う犠牲者が出ることは百日咳ワクチンの訴訟･中断の歴史で明確だ。交通事故死をなくすために自動車をやめろという意見は聞かない。実績も含め、冷静な判断が必要ではないか。

市民への啓蒙と行政への働きかけ。小児科医の活動の責任は大きいと思うのだ。

7月講演会のお知らせ

日　時：2017年7月4日（土）13:00～16:45
会　場：日本図書館協会　2F研修室
〒104－0033　東京都中央区新川　1－11－14
TEL：03－3523－0811（代表）
地下鉄東西線・日比谷線「茅場町駅」1・3番出口

＜演　題＞

1）神田美子氏（にこトマ文庫）
テーマ：「できることは何でも～にこトマ20周年を迎えて～」

2）家田史子氏（青梅市立総合病院）
テーマ：「患者図書室の変遷と患者さんの意識の変化 from2003」

3）成毛モモ氏（千葉メディカルセンター）
テーマ：当院における患者図書サービスの現状と課題

参加申込みおよび問合せ先

参加ご希望の方は下記へお申込み下さい。 送信する項目は1）氏名、2）所属、3）e-mailアドレス、4）懇親会参加の有無、をお知らせ下さい。

Email：info@kanjatosho.jp
全国患者図書サービス連絡会

電子ジャーナルホスティングサイト
PierOnline ピアオンライン

PierOnlineは国内の学術出版社が発行する医学・薬学・看護系の学術誌を電子ジャーナルとして提供するホスティングサイトです。ご利用は提供される電子ジャーナル1誌ごとに年間契約が可能です。冊子体（本誌）の非購読者は論文単位でのPayPerView購読が可能です。

「外科」「内科」「整形外科」「別冊整形外科」「胸部外科」がセットになった
「南江堂オンラインJournal」に「がん看護」が追加されました！

「南江堂オンライン Journal」の特長

- エンバルゴはありません。いつでも最新号から閲覧できます。
- 増刊号や増大号ももれなく閲覧できます。
- 同時アクセスは無制限です。複数人が同時に利用することができます。
- 写真や図も大変鮮明にご覧いただけます。
- 全文検索により、もれの無い検索を実現。
- 気になった論文をブックマークして、好きな時に簡単に閲覧できます。
- バックナンバーが充実しています

ご契約と同時に、PierOnline に収録されている南江堂オンライン Journal のバックナンバー全てが閲覧可能となります。「外科」、「内科」、「整形外科」、は 2001 年から、「別冊整形外科」は 2000 年から、「胸部外科」は 2004 年から、「がん看護」は 1996 年（創刊号）からご覧いただけます。

「南江堂オンラインJournal」を
購読できるのはPierOnlineだけです！

Content Solutions Company
SUNMEDIA 株式会社サンメディア e-Port e-mail：pier@sunmedia.co.jp

本社 〒164-0012 東京都中野区本町 3-10-3 PORT ビル
Tel：03-3299-1575 Fax：03-3374-1410

大阪オフィス 〒550-0003 大阪市西区京町堀 1-3-3 肥後橋パークビル 4F
Tel：06-6444-7720 Fax：06-6444-7730

国内最大級の医学文献情報データベース
医中誌Web Ver.5
デモ版 http://demo.jamas.or.jp/

Database 国内発行の医学・歯学・薬学・看護学等の定期刊行物のべ約6,000誌から収集された膨大な医学文献情報をインターネットで検索できます。検索対象は1977年から最新データまで約1,000万件。

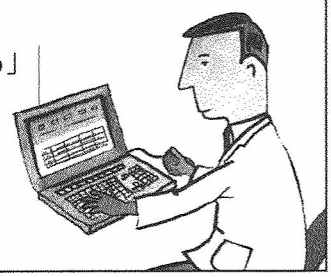
Interface 直感的に検索できる検索インターフェースをご用意しています。また、医学用語シソーラスや検索履歴を使い、より適合性の高い検索結果を得ることができます。

Link 医中誌Webから電子ジャーナルや全文PDF等のフルテキストサービスへのリンク件数は約280万件、うち約88万件は無料で公開されています（2015年4月現在）。また、図書館システムとのリンクも行えます。

Customize 大学・病院・企業・公共図書館などそれぞれの環境に応じたご利用機関ごとのカスタマイズ、「My医中誌」による個人ごとのカスタマイズが行えます。

法人向け「医中誌Web」
1年間の固定料金制。同時アクセス数1-2で250,000円（税抜）～

個人向け「医中誌パーソナルWeb」
1ヶ月8時間利用で2,000円（税抜）～



特定非営利活動法人 医学中央雑誌刊行会 http://www.jamas.or.jp/
NPO ICHUSHI
〒168-0072 東京都杉並区高井戸東2-5-18
TEL:03-3334-7575 FAX:03-3334-0497 E-MAIL:info@jamas.or.jp

名作を大きな文字で味わおう！
講談社オンデマンドブックス・大きな文字の青い鳥文庫シリーズ

子どもの頃読んだあの名作、
じっくり読んでみたい
あの作品を
22ポイント・ゴシック体で。

『青い鳥』 メーテルリンク／作　保永貞夫／訳　かみやしん／絵
『赤毛のアン』 L・M・モンゴメリ／作　HACCAN／絵　村岡花子／訳
『赤毛のアン2　アンの青春』 L・M・モンゴメリ／作　HACCAN／絵　村岡花子／訳
『芥川龍之介短編集　くもの糸・杜子春』 芥川龍之介／作　百瀬義行／絵
『賢者の贈り物』 O・ヘンリー／作　飯島淳秀／訳　そらめ／絵
『クリスマスキャロル』 チャールズ・ディケンズ／作　杉田比呂美／絵　こだまともこ／訳
『ごんぎつね』 新美南吉／作　ささめやゆき／絵
『龍の子太郎』 松谷みよ子／作　田代三善／絵
『走れメロス』 太宰　治／作　村上　豊／絵
『ハチ公物語 ―待ちつづけた犬―』 岩貞るみこ／作　真斗／絵　田丸瑞穂／写真
『ふたりのイーダ』 松谷みよ子／作　司　修／絵
『フランダースの犬』 ウィーダ／作　亜沙美／絵　松村達雄／訳
『星の王子さま』 サン＝テグジュペリ／作・絵　三田誠広／訳
『坊っちゃん』 夏目漱石／作　にしけいこ／絵
『宮沢賢治童話集1　注文の多い料理店』 宮沢賢治／作　太田大八／絵
『宮沢賢治童話集2　風の又三郎』 宮沢賢治／作　太田大八／絵
『宮沢賢治童話集3　銀河鉄道の夜』 宮沢賢治／作　太田大八／絵
『宮沢賢治童話集4　セロひきのゴーシュ』 宮沢賢治／作　太田大八／絵
『若草物語』 オルコット／作　中山知子／訳　藤田　香／絵
『八雲怪談傑作集　耳なし芳一・雪女』 小泉八雲／作　黒井　健／絵　保永貞夫／訳

■ご注文・お問い合わせ
（資料をお送りいたします）
〒171-0031　東京都豊島区目白3-21-6　ヴェルディエ目白101
電話：03-5988-9160　ファックス：03-5988-9161　Eメール：info@d-kobo.jp　http://www.d-kobo.jp/
有限会社 読書工房

全国患者図書サービス連絡会会報　ISSN 1334-2937

第21巻　第2・3号（通巻75号）　2015年4月30日発行

発　行：全国患者図書サービス連絡会（http://kanjatosho.jp/）
〒939－2692　富山県富山市婦中町新町3145
独立行政法人国立病院機構富山病院・気付
連絡先：　Email：info@kanjatosho.jp
yamamuro@tb3.so-net.ne.jp
印刷所：　株式会社　中島印刷所
〒232－0026 横浜市南区二葉町4－39

年会費は下記へお願いします。
振込口座　　00590－4－9311
加入者名　　全国患者図書サービス連絡会
年会費・購読料共　4,000円